

## 難聴者のアイデンティティ形成に関する検討

—多文化に繋がる子どものアイデンティティ形成との関連から—

藤 嶋 桃 子 (愛知教育大学大学院特別支援教育科学専攻)  
岩 田 吉 生 (愛知教育大学特別支援教育講座)

**要約** これまで聴覚障害者に属する「難聴者」という立場は、「聞こえにくい状況がありながらも健聴者の文化に所属する存在」、「健聴者やろう者というそれぞれの文化に属さない不安定な存在」などとして考えられてきたが、近年は、聴覚障害者が形成するアイデンティティの新しい概念として「難聴者」の存在が示唆されている。しかし、これまでの先行研究においてその詳細は十分に解明されていない。本研究では、聴覚障害者のアイデンティティ形成の研究に加えて、難聴者と同様に、二つの文化の所属に葛藤することが予想される国際児のアイデンティティ形成の研究をレビューすることで難聴者のアイデンティティ形成を検討するうえでの視座を得ることを目的として検討を行った。その結果、国際児にとって最も自然で安定的な「国際児としてのアイデンティティ」のように、健聴社会とろう社会の二言語二文化を習得し、両者の橋渡しの立場で生きる「難聴者としてのアイデンティティ」の存在が考えられた。

**キーワード**：アイデンティティ形成, 聴覚障害者, 国際児, 難聴者

### I. はじめに

#### 1. 研究の背景

聴覚障害者におけるアイデンティティの問題は、心理、教育の領域で取り上げられ、検討が進められてきた。そもそも「アイデンティティ」とは、Erikson (1959: 西平・中島訳, 2011) に提唱された用語であるが、その使用は論文により様々である。ここではまず本研究におけるアイデンティティの用語を定義する。アイデンティティとは「成長しつつある子どもが生き生きとして現実感を獲得すること」であり、その形成には「自身の内部の斉一性と連続性 (自我アイデンティティ)」と「その斉一性・連続性が他者に認められること (集団アイデンティティ)」が重要と言われる。そして後者の集団アイデンティティの一部に文化的アイデンティティが位置づけられている。聴覚障害者のアイデンティティ形成には、健聴文化とろう文化への接触が関与するという文化的視点で検討されてきた (Glickman: 1996, 山口: 1997, 2001, 甲斐・鳥越: 2006)。本研究でも、文化的視点で難聴アイデンティティ形成の検討を試みるため、「アイデンティティ」を「文化的アイデンティティ」を指す用語とする。ところで、文化的アイデンティティについては、国際結婚家庭に生まれた子どものアイデンティティ形成の研究を縦断的に行ってきた鈴木 (2011) が、「自分がある集団に所属し文化を共有しているという感覚」と定義しており、本研究でも「文化接触を通して自分がある集団に所属している感覚」として用いることとする。

これまでの研究において、聴覚障害者が形成するアイデンティティは、健聴文化とろう文化という二言語二文化への接触、各々の文化世界への葛藤や所属を通して形成されると考えられてきた。近年では、人工内

耳を幼少期に装着して生きる聴覚障害者が増加している。特別支援教育の制度の移行に伴い、通常の学校で学ぶ聴覚障害児は個々のニーズに応じた配慮がなされているが、現在でも通常の学級で学ぶ場合には健聴児の学習についていくことが一般的であるため、敢えてインクルーシブ (包括教育) でなく、インテグレート (統合教育) が続いており、人工内耳装着児の多くが通常の学校・学級にインテグレート (統合教育) している現状がある。幼少期に人工内耳を装着した聴覚障害者は、ハビリテーションにより 25～40 dB 程度の軽度難聴と同程度の補聴閾値レベルによる音声言語を獲得し、難聴者となる。そして、彼らのなかには、難聴者として、または聞こえにくさのある健聴者として、生きていく者がいることが予想される。難聴者のアイデンティティ形成は、近年検討されているが、形成するアイデンティティやその要因、形成プロセスの解明は未だ不十分である。そこで、本研究では、先行研究のレビューを通して難聴者のアイデンティティ形成を検討することとする。

#### 2. 難聴者と国際児のアイデンティティ形成の関連

これまで、難聴者や幼少期に人工内耳を装着した聴覚障害者は、聞こえにくい状況がありながらも健聴者の文化に所属する存在として、または健聴者にもろう者にも所属できない中途半端な存在と捉えられてきた (上農: 2003)。二つの文化・言語に接触しながら自身の所在を探すものの、難聴者の言語や文化は存在しないため、曖昧な立場となるからである。しかし、世界には難聴者と同じように二つの文化・言語の間で自身の所在を模索しながら、安定したアイデンティティを形成していく子どもがいる。それは、国際結婚の両親の間に生まれた子どもである。彼らは、異文化の両

親のもとで、両親の考えによって選択された学校環境で自己を形成し、様々な要因のなかで文化も言語もない中間の存在としてアイデンティティを形成していく。このような国際結婚の両親の間に生まれた子どものアイデンティティ形成は、二つの文化・言語の間で自身の所在を模索していく点と、親と子どもの間に文化の捉え方の違いが現れる可能性がある点で難聴者のアイデンティティ形成と類似する点があることが想定される。よって、これらの先行研究を検討し関連を明らかにすることで難聴者のアイデンティティ形成を検討する何らかの視座を得ることができるのではないかと考えた。

以上より、本研究ではまず、異文化接触を経験し、アイデンティティを形成する国際結婚の両親の間に生まれた子どもを対象とした研究と、聴覚障害者のアイデンティティ形成に関する研究を対象に先行研究のレビューを行う。そして、そこで得られた知見を参考に難聴者のアイデンティティ形成について検討する。

尚、鈴木(2016)は、国籍と民族が異なる男女の間に生まれた子どもを国際児と定義しており、本研究でもこの定義に倣い、異国籍の両親の間に生まれた子どもを「国際児」と呼ぶこととする。この言葉は「ハーフ」や「混血児」と呼称される子どもの国籍や家族関係を考慮して定義されたものであり、異文化の両親のもとに生まれ二つの文化の間で自身の帰属意識に葛藤する子どもを数多く含んでいる。また、定義上、「児」という言葉がつくものの、異文化の両親のもとに生まれた幼児期や児童期の子どものみを指す名称ではない。

また、ここで聴覚障害に関する用語を整理しておく。聴覚障害者とは、聴覚器官に障害があり、聞こえにくさのある者を指すが、聞こえにくさの程度はさまざまであり、他者から見えにくい障害である。聴覚障害者は、聴力レベルやコミュニケーション手段、教育歴などさまざまな考え方によって「ろう者」と「難聴者」とに分類されるため、正確な定義づけは難しい。しかし、本稿では、岩田(2007)の聴覚障害に関する用語を参考に「ろう者」を先天性の聴覚障害者または乳幼児期に失聴した者で90 dB～110 dB以上の聴力レベルで補聴器による聴覚活用が困難であるため、主たるコミュニケーション言語を手話とする者、「難聴者」を先天性または後天性の失聴時期は様々であり、90 dB～110 dB以下の聴力レベルで補聴器や人工内耳による聴覚活用がある程度可能であるため、主たるコミュニケーション言語を音声言語とする者として考えることとする。

## II. 国際児のアイデンティティ形成に関するこれまでの研究

### 1. 方法

調査の対象は、二文化接触を経験する国際児(ハーフ、ダブル)のアイデンティティ形成について検討した論文である。論文選択の基準は、

- (i) 国際児を対象としている論文
- (ii) アイデンティティについての記載だけでなく、国際児のアイデンティティ形成に関する検討が行われている論文の2点とした。

論文の探索には、「CiNii Articles 国立情報学研究所 学術情報ナビゲータ」の検索エンジンを用いた。予備調査として「異文化andアイデンティティ(すべて)」の検索語でヒットした研究論文207件について、abstractを読み、上記の条件に当てはまるものを選び出した。しかし、国際児を対象にした研究論文は少なく、条件に合う論文は4件とかなり絞られた。そのため、「国際結婚andアイデンティティ(すべて)」の検索語で再度検索した。ヒットした論文は24件であり、このうち条件に合う論文は4件であった。そこで、「国際児andアイデンティティ(すべて)」の検索語で再度検索を行ったところ11件がヒットしこのうち条件に合う論文は10件であった。これらの検索語でヒットする論文が少ない背景には、「ハーフ」と呼称されてきた子どもたちの名称が日本社会における「混血であること」の社会的意味の向上に伴い、「あいのこ」→「混血児」→「ハーフ」→「国際児」→「ダブル」へと変化してきたこと(関口:2003)や同じ国際児を指す名称でも使用されてきた用語が親の文化により様々であることが考えられる。そこで、本研究では可能な限り多くの研究論文を収集するため「ハーフandアイデンティティ(すべて)」「ダブルandアイデンティティ(すべて)」の検索語でも検索し、ヒットした論文、さらに各論文に引用されている研究論文や著書も調べ、上記条件に当てはまるものがないかどうか調べた。

### 2. 結果

2018年11月8日現在、「異文化andアイデンティティ(すべて)」「国際結婚andアイデンティティ(すべて)」「国際児andアイデンティティ(すべて)」「ハーフandアイデンティティ(すべて)」「ダブルandアイデンティティ(すべて)」の検索語でヒットした269件の論文のうち重複した論文、上記の条件を満たさない論文を除いた21件を研究対象とした。また、論文に引用されていた研究論文や著書16件が上記の条件に当てはまったため、これらを合わせた37件を有効論文とした。研究の一部で国際児を対象にした調査を行っており、先行研究で頻繁に引用・参考文献として用いられている箕浦と関口の複数の研究論文も対

象とした。

### 3. 国際児のアイデンティティ形成に関する研究の変遷過程

国際児のアイデンティティ形成に関する研究には、異文化間接触を経験する子どものうちの一人として、第一に箕浦（1984）が着手した。箕浦は、アメリカで育った日本人青年を対象に異文化接触を経験する者のアイデンティティの形成過程を文化人類学の視点で検討し、感受期というアイデンティティの基礎となる時期が存在することを明らかにした。第二に、鈴木（1992～）は対象を日本とインドネシアまたは日本とドイツの両親をもつ国際児に特化し10年間の縦断的研究を行った。国際結婚家族の子どもとその両親への調査から、国際児における安定的アイデンティティが二言語二文化を混合したアイデンティティであることや、アイデンティティ形成には居住地や学校環境、両親の指向性や子供の教育の考え方などの要因が関与することを明らかにした。また、近年も多様な国際児を対象に検討を続け、鈴木自身の理論の信頼性を明らかにしようとしている。第三に、マーフィ重松（2002, 2014）は、当事者である自身を含む成人のアメラジアン語りから、国際児のアイデンティティ形成過程を明らかにし、アイデンティティ形成における所属集団の重要性を明らかにした。以上の箕浦、鈴木、マーフィ重松の研究を経て近年は、竹田、森川、小ヶ谷、今里などにより多様な国際児に着目した研究が行われているため、第四に、近年の研究をまとめて記す。竹田（2008）は、アイデンティティを測定する従属変数とアイデンティティの確立に影響する独立変数を設定し、日本だけでなく海外在住の国際児を対象に量的調査を行った。両親の文化継承、社会による差別的な見方を乗り越えることの二要因がアイデンティティ形成にプラスに影響することを明らかにした。森川（2009）は日本とフィリピンまたはタイの両親をもつ、思春期段階の国際児への調査から、子どもを捉える他者と子ども自身の認識を比較し、自他認識のずれを明らかにした。加えて、事例からハーフアイデンティティの存在を報告し、規定されたカテゴリーから逸脱した自分という存在を認める必要性を明らかにした。また、小ヶ谷（2017）は、日本とフィリピンの両親をもつ国際児青年を対象に国際児としてのアイデンティティの形成過程をライフストーリーで明らかにした。そして、社会の受け入れ態勢が肯定的な自己認識につながることを明らかにした。今里（2017）は、大学生になり初めて韓国への留学経験をした日本と韓国の両親をもつ国際児を対象に、留学経験によるアイデンティティの変化を調査したところ、大学生で異文化接触をしてもアイデンティティは変容しないことを明らかにした。

このように国際児のアイデンティティ形成を検討し

た研究は、鈴木を筆頭に近年も行われている。形成するアイデンティティだけではなく、その形成過程や要因についての検討が行われている。

#### 3-1. 国際児のアイデンティティ形成の検討課題

##### 3-1-1. 異文化で育つ子どものアイデンティティ形成における葛藤の要因

国際児がアイデンティティ形成に葛藤する要因には、「自他認識のずれ」と「自己認識の不一致」の二つがある。まず「自他認識のずれ」では、箕浦（1994）、マーフィ重松（2002）が国際児であることにより、自分の国籍および自分の所在について何人（なにじん）かの認識が自己と他者とで異なり、集団への所属感が得られなかった事例から、自他認識が異なることが孤独感や苦しみ、葛藤を抱くことを明らかにした。自他認識にズレが生じる原因には、国際児のエスニシティが関与しており（関口：2003）、自己認識では自分が育ちのなかで獲得した文化を重視する。一方で、他者認識ではエスニシティである国籍や身体的特徴を重視することが明らかとなった（箕浦：1994）。次に「自己認識の不一致」についても、エスニシティという実質的側面と自己認識にズレが生じることが原因であることが明らかとなった（箕浦：1994）。Erikson（1959：小此木訳、1973）は、アイデンティティの形成に斉一性と連続性が重要であることを示しており、国際児の自己認識の不一致が斉一性の困難さを生むことが背景にある。以上より、二文化接触を経験する国際児独自のアイデンティティの葛藤が明らかとなった。そして、国際児がアイデンティティを形成するためには国際児であるという事実を本人が受け入れる必要があることが伺える。

##### 3-1-2. アイデンティティ形成過程

国際児などの二文化接触を経験する人の文化的アイデンティティの形成過程は、箕浦（1984）が理論的に検討した。箕浦は、人間は9歳から14、15歳に文化を獲得する時期（感受期）があり、文化的な意味での「何人」という捉えの原型（意味空間）が作られることを明らかにした。中島（1992）も5、6歳から10、11、12歳に接触してきた文化特有のものの感じ方や価値観、基本的行動パターンが形成されることを明らかにしており、箕浦の見解とだいたい一致する。また、箕浦（1984）は、感受期以降は形成された意味空間が文化的インプットを受けて形を変えていくことを述べており、アイデンティティが感受期に完成するわけではなく、その後の環境要因が作用して形成されることを明らかにした。これらの感受期の存在を実証的に明らかにしたのが鈴木・藤原（1993）、鈴木（1999, 2011）である。鈴木（2011）は、思春期までを日本で過ごし文化移動した日イ国際児のアイデンティティの

変化を調査し、移動後の文化への適応に苦勞した事例を報告した。また、鈴木・藤原 (1993)、鈴木 (1999) は、一度獲得した文化的アイデンティティが一生続くのではなく、様々な要因が複雑に交差し相互に影響し合うことで形成されることを明らかにした。以上より、国際児のアイデンティティは感受期までに「自分が何人であるか」(=自分の国籍および所在) という意識を一度形成するものの、その後、複数文化を統合しながら本当のアイデンティティが形成されることがわかる。

### 3-1-3. アイデンティティ形成の要因

国際児のアイデンティティ形成の要因は、言語・文化を形成する際の要因と国際児を受け入れる環境の二つに大きく分類できる。鈴木 (2004, 2005, 2008) は、言語文化を形成する要因には、①居住地 (鈴木: 1997, 1999, 2001, 2008, 2010 など) ②日本人の親の性別 ③両親の国の組み合わせ ④国際児の外見的特徴 (箕浦: 1994, マーフィ重松: 2002) ⑤学校環境 ⑥家庭環境 (鈴木: 2007) の6つがあることを明らかにした。なかでも、言語文化の習得に関与する①居住地や⑤学校環境、所属に関与する④外見的特徴は、アイデンティティを形成する主な要因となる。しかし、以上の要因により言語文化を習得するだけではアイデンティティの形成はできない。習得した言語、文化により形成される自己意識が他者にも受容されて初めて所属意識・アイデンティティが形成されるからである。よって、鈴木 (2012) が明らかにしているように国際児を受け入れる学校や地域のコミュニティなどの社会環境も重要となる。

### 3-1-4. 国際児としてのアイデンティティ

国際児にとって最も自然で安定的なアイデンティティは、「国際児としてのアイデンティティ」であることが明らかにされてきた (マーフィ重松: 2002, 鈴木: 2004, 2008, 2016, 森川: 2009, 小ヶ谷: 2016)。国際児としてのアイデンティティとは、二つの文化が混合、融合し、どちらの集団にも所属し繋がることのできるアイデンティティである。小ヶ谷 (2016) は、国際児としてのアイデンティティを形成したことで両文化を楽しむ存在として自己を再定義し、自己を肯定した事例を報告した。また、鈴木 (2016) は、精神的健康の項目を用いてその安定性を明らかにした。以上のことから、「国際児としてのアイデンティティ」が国際児にとって安定的なアイデンティティであることがわかる。しかし、鈴木 (2004, 2008) は同時にこのアイデンティティ形成には二言語二文化のバイリンガルである必要性を示した。そして、国際児としてのアイデンティティ形成についても要因を検討している。鈴木は、アイデンティティ形成の5要因に加えて二言

語二文化継承には親の志向性や子どもの教育に対する考え方が重要であり、特に居住地と異なる文化をもつ親による文化継承が二言語二文化習得を促進することを明らかにした。また、文化継承には、越境経験による文化接触も関与することを明らかにした (鈴木: 2004)。そして、やはり、国際児を受け入れる環境がアイデンティティ形成には重要であり、マーフィ重松 (2014) は、同じ国際児に出会う場こそが国際児を受け入れる環境、集団であることを明らかにした。

## III. 聴覚障害児のアイデンティティ形成に関するこれまでの研究

### 1. 方法

論文の探索には、「CiNii Articles 国立情報学研究所 学術情報ナビゲータ」の検索エンジンを用いた。検索語を「聴覚障害 and アイデンティティ (すべて)」「聴覚障害 and 自己同一性 (すべて)」、「聴覚障害 and 自己意識 (すべて)」として検索し、ヒットした研究論文とした。また、可能な限り多くの研究論文を収集するためにヒットした論文に加えて、各論文に引用されている研究論文や著書も調べた。調査の対象は、聴覚障害者のアイデンティティ形成について検討した論文である。論文選択の基準は、

- (i) 聴覚障害児を対象としている論文
  - (ii) アイデンティティについての記載だけではなく、聴覚障害児のアイデンティティ形成とその要因に関する検討が行われている論文
- の2点とした。

### 2. 結果

2018年12月13日現在、「聴覚障害 and アイデンティティ (すべて)」、「聴覚障害 and 自己意識 (すべて)」の検索語で検索し、ヒットした論文は28件であった。このうち、論文選択基準を満たさない論文15件を除く13件と、各論文に引用されている研究論文や著書のなかで、論文選択基準を満たした12件の合わせた25件を対象とし検討を行った。

表1 対象・年代別の聴覚障害者のアイデンティティ研究の論文数

	聴覚障害者	難聴者	人工内耳装用者
1990-1999	6	0	0
2000-2009	9	3	1
2010-2018	0	2	4
合計	15	5	5

### 3. 聴覚障害児のアイデンティティ形成に関する研究の変遷過程

聴覚障害者のアイデンティティ形成に関する検討

は、日本では約20年前に最盛期を迎えた(坂田:1990a, 1990b, 山口:1996, 1997, 1998, 2001, 杉田:2000, 岩田:2001a, 2001bなど)。我が国では、第一に坂田(1990a, b)が、聴覚障害者は健聴者の世界で自己像をもちながら成長することで心理社会的発達不十分となり、アイデンティティ形成に困難が生じていると主張した。とくに、高校卒業までと卒業以降での自己像の変化に着目し、普通学校出身の青年・成人聴覚障害者を対象に面接調査を行った。多くの事例は、高校卒業までは健聴者に同一化していた聴覚障害者が高校卒業後に手話や聴覚障害者のモデルとかわり、対等なコミュニケーションができる喜び・満足感を得ていた。そして、これを機に障害者としての自己を形成し、対人関係や情緒面、思考に影響をもたらすことを明らかにした。第二に、山口(1996, 1997, 1998)は、坂田の研究を受け、コミュニケーションの困難さにより健聴者に対して抱く孤立感や疎外感、葛藤が聴覚障害青年のアイデンティティ形成を困難にすると考え、実証的に調査した。一連の研究を通して、健聴者への葛藤を構成する疎外感や障害の否定的認識、不平等関係、両親との葛藤がアイデンティティ形成を阻害することを明らかにした。また、聴覚障害者が形成することが示唆された3タイプのアイデンティティのうち「健聴者アイデンティティ」と「聴覚障害者アイデンティティ」は健聴者への葛藤を抱きながら形成されるものであり、「統合的(聴覚障害者/ろう)アイデンティティ」が最も安定することを明らかにした。また、山口(2001)は、ろう者と自己を定義している聴覚障害青年に着目し、ろうアイデンティティの形成過程を質的に検討した。健聴者への葛藤や聴覚障害者との出会いを経験しながら「混乱段階」「出会い段階」「没頭段階」「統合段階」の4段階を経てろうアイデンティティが形成されることを明らかにした。第三に、甲斐・鳥越(2006)は、聴覚障害者が形成するアイデンティティ形成の様相を明らかにするためにろう学校高等部の生徒を対象に質問紙調査を実施した。そして、抽出した5因子からGlickman and Carey(1993)の「健聴段階」「境界段階」「没頭段階」「統合段階」の4段階から成るろうアイデンティティ発達モデルの有効性を明らかにした。以上のように、1990年から2000年初頭にかけて健聴社会で抱く心理的な葛藤に着目しながら聴覚障害者のアイデンティティ形成過程が徐々に明らかになってきた。そして、2000年を過ぎると地域の学校で聞こえる存在として生きてきた難聴者のアイデンティティ形成に焦点が当てられた(藤邑:2002, 河崎・若狭:2008, 島根・井上:2010など)。これまで手話を用いる聴覚障害者/ろう者としてのアイデンティティを形成することが最も安定的であると考えられてきたが、これらの研究を通して「難聴者としてのアイデンティティ」を形成す

る者の存在が明らかになってきた。しかし、難聴者のアイデンティティ形成に関する研究は未だ少なく(藤邑:2002, 島根・井上:2010)その様相は十分に明らかになっていない。このようななか、人工内耳という聴覚補償機器が登場し、難聴者として生きる人が増えていくことが予想され始め、人工内耳装用児・者を対象にしたアイデンティティ形成についても検討され始めている(黒田:2008, 荒木・新井:2017など)。

### 3-1. 聴覚障害児のアイデンティティ形成における葛藤の要因

我が国の研究では、聴覚障害者がアイデンティティ形成に葛藤する要因として、健聴者に同一化できずに抱く葛藤や孤独感が挙げられてきた。この要因は二つあり、一つはコミュニケーションの困難さにある。坂田(1990a, 1990b), 岩田(2001b)は聞こえないことで健聴者とのコミュニケーションが難しいため、孤独感を抱くことを明らかにした。また、山口(1998)は対等にコミュニケーションする自信の欠如が聴覚障害者の心理社会的発達を妨げることを実証しており、アイデンティティ形成にはコミュニケーションを通じた仲間や居場所の存在が重要であることがわかる。二つ目は、自己を否定的に捉えることである。坂田(1990a, 1990b)は、健聴者を目指すことで自分の障害だけでなく自分自身も否定してしまうことを明らかにした。これは障害認識ができていない状態を指すとも考えられ、アイデンティティ形成における障害認識の重要性も明らかとなっている。

### 3-2. 聴覚障害者アイデンティティの形成と関連要因

聴覚障害者が最も心理的に安定するアイデンティティは、聴覚障害者/ろうアイデンティティ(論文最後の「補足」参照)であることが日本でも鳥越(1998)や山口(1998)により明らかになった。聴覚障害者/ろうアイデンティティとは、自身が聴覚障害者であることを認め、聴覚障害者の集団に所属意識をもち、健聴社会で生きていくことである。このアイデンティティの安定性については、山口(1998)により聴覚障害者が形成するアイデンティティ3タイプ(①健聴者アイデンティティ, ②聴覚障害者アイデンティティ, ③統合的アイデンティティ)のなかで最も健聴者との葛藤が低いことを実証されていることから明らかである。

#### 3-2-1. 聴覚障害者アイデンティティの形成過程

聴覚障害者/ろうアイデンティティは、段階を経て形成されることが明らかになっている(坂田:1990a, 1990b, 山口:2001, 藤邑:2003, 甲斐・鳥越:2006)。どの論文も各段階の呼称は異なるもののその内容はおおよそ合致しているため、ここでは山口

(2001)の結果を示す。山口によると、聴覚障害者/ろうアイデンティティは4段階で形成されることが明らかになった。第一に、自己を否定し、劣等感や孤立感を抱きながら健聴者へ同一化する「混乱段階」、第二に、環境の変化を経て、ロールモデルとなるろう者や対等な関係をもてる健聴者、聴覚障害者団体への参加を通して障害を受容し、自己を肯定する「出会い段階」、第三に、健聴者へ異議申し立てをしたり、ろう者としての在り方を模索したりする「没頭段階」、第四に、聴覚障害者としての自己を認識し、自信をもって健聴者の社会のなかで生きる「統合段階」である。

### 3-2-2. アイデンティティ形成の要因

聴覚障害者/ろうアイデンティティの形成には、手話との出会い、同障者とのかかわり、教育歴、障害認識と親の障害観の4つの要因がある。まず、1つめの手話との出会いでは、そもそもアイデンティティ形成が困難な要因にコミュニケーションの困難さにあることから、手話を用いて対等なコミュニケーションをすることの重要性が多くの研究で明らかにされた(坂田:1990a, 1990b, 杉田:2000 相良他:2001)。そして、手話でのコミュニケーションが対等な友人関係の形成と自信保持につながり、アイデンティティ形成に重要なことが明らかになった。2つめに、同障者とのかかわりでは、多くの研究で聴覚障害者団体への参加など聴覚障害者とのかかわりをきっかけに障害の捉え方が変容し、心理的に安定する事例が報告された(坂田:1990a, 1990b, 山口:1998, 2001, 杉田:2000, 相良他:2001)。また、かかわりのなかで聴覚障害者として自信をもって生きるロールモデルの存在が聴覚障害者のアイデンティティ形成においても重要であることが示唆されている(杉田:2000, 山口:2001)。次に、同障者とのかかわりと関与するが、3つめの教育歴の重要性も明らかにされていることを述べておきたい。2000年頃までろう学校でも手話教育が導入されていなかったため近年の研究で明らかになったことではあるが、聴覚障害者/ろうアイデンティティを形成する聴覚障害者には一貫してろう教育を受けてきた者が多い(島根・井上:2010, 窪田他:2016)。ろう学校という手話で他者と対等にコミュニケーションできる環境も重要となる。さらに、4つめに障害認識がある。アイデンティティ形成における障害認識の重要性については、聴覚障害者が手話を用いて同障者とかかわることを通して障害の捉え方が変化し心理的に安定するという上記の記述からも明らかである。最後に、5つめの親の障害に対する考え方について述べる。聴覚障害児の障害認識が困難な理由として、相良他(2001)、河崎(2003)は、親の障害に対する考え方が関与することを明らかにしており、親の障害の捉え方も聴覚障害のある子どものアイデンティティ形成に関

与することがわかる。

### 3-3. 難聴者のアイデンティティ形成

近年は、難聴者を対象としてアイデンティティが検討され、ろう者としてだけでなく、難聴者という生き方の存在も明らかにされてきた(藤邑:2002, 岩田:2007, 山口:2011, 島根・井上:2012, 窪田他:2016)。藤邑(2002)は、手話を用いない難聴者が「健聴者とろう者の中間的で曖昧な存在」から「音のある世界と無い世界とを移行可能な存在」へ自己意識が変化したことを報告し、手話を用いずとも肯定的に難聴者として生きている聴覚障害者の存在を明らかにした。続いて、島根・井上(2010)や窪田他(2016)も「難聴者としてアイデンティティ」を形成する聴覚障害者の存在を明らかにした。島根・井上(2010)は、難聴者としてのアイデンティティを構成する要因について検討し、藤邑(2002)とは異なり、自身を難聴者と認識する者全員のコミュニケーション手段が手話であることを明らかにした。窪田他(2016)では、難聴者としてのアイデンティティを形成するグループと手話との関連については明らかにされなかった。これらより、難聴者には「難聴者としてのアイデンティティ」を形成する者がいるものの、手話を用いるか否かなどその背景については研究論文が少なくかつ一貫した結果が得られていない。

このようななか、近年は人工内耳が登場し、幼少期から人工内耳を装用する聴覚障害者が増加している。音のある世界に生きる人工内耳装用児は多くが難聴者として生きることが予想される。対象は思春期の人工内耳装用児であるものの、荒木・新井(2017)は人工内耳装用児のアイデンティティ形成を検討した。教育環境の異なる2例への調査から、インテグレートしている児は「難聴者としてのアイデンティティ」、ろう学校に通う児は「聴覚障害者/ろうアイデンティティ」を形成していることを明らかにした。思春期段階でのアイデンティティは形成途中であるため十分とは言えないが、この研究により「難聴者としてアイデンティティ」を形成する人工内耳装用児の存在も明らかとなった。

## IV. 考察

国際児としてのアイデンティティと聴覚障害/ろうアイデンティティ、近年検討され始めている難聴者としてのアイデンティティに関する先行研究をレビューした結果、国際児のアイデンティティ形成と聴覚障害者のアイデンティティ形成に類似点が見えてきた。

まず、アイデンティティ形成における葛藤についてである。両者ともアイデンティティ形成に葛藤が生じ、その要因には自身の「生物学的要素」が関与して

いた。国際児の場合、生物学的要因の一つである血筋や国籍と環境により形成された自己とその認識のズレや、この自己認識と他者の外見的特徴による認識にズレが生じることが葛藤の原因となる。聴覚障害者の場合も、健聴者への同一化を目指し、自身の障害を否定的に捉え、誤った自己認識を形成することで、聴覚障害者であるという事実との間にズレが生じることが明らかになった。特に難聴者や人工内耳装用者は自分の聞こえにくさを認識することが難しいため、自身の認識にズレが生じやすい。国際児と同様に難聴者が安定したアイデンティティを形成するためには、難聴者であることを正しく認識する必要があることが考えられた。

次に、「アイデンティティ形成とその要因」についてである。Erikson (1959) はアイデンティティ形成に連続性が重要であるとした。しかし坂田 (1990) は、聴覚障害者のアイデンティティ形成には連続性がないと考えた。この指摘は山口 (1997) により否定されたものの、これまでの研究により聴覚障害者/ろうアイデンティティの形成には健聴者への同一化段階の後に聴覚障害者と出会い、聴覚障害者モデルへ同一化することが明らかになった。そして、ろう文化・手話を獲得し、ろう者として健聴社会に堂々と生きる「聴覚障害者/ろうアイデンティティ」が最も安定的であることが明らかになった。国際児のアイデンティティの場合にも、意味空間が形成された後に様々な要因によりアイデンティティが形成されることがわかっている。そして、国際児の場合、二言語二文化を習得し、両集団に所属することのできる「国際児としてのアイデンティティ」を形成することが最も安定的であることが明らかになった。

「アイデンティティ形成の要因」については、どちらも「①彼らを受け入れる環境」「②自分自身の認識の一貫性」「③教育環境など文化接触に関与する環境」が重要であることが明らかになった。特に、③の教育環境は、両者ともに親の子供の教育に対する考え方により決定されることが多く、子供の文化接触を規定する環境は親によって決定されることが示唆された。

以上より、国際児と聴覚障害者のアイデンティティ形成とその要因には類似点があることが明らかになった。特に、両者のアイデンティティ形成がある時期の「何人(なにじん)」(=自分の所在)という認識を越えた後にも様々な要因が関与して形成されていくことや、アイデンティティ形成の要因に彼らを受け入れる環境や自身の実質的側面の認識、本人や親の選択に起因する文化接触に関与する要因があることが類似点であった。しかし、両者とも二言語二文化への接触は経験するものの、最も安定するアイデンティティと文化的要素には違いがみられた。国際児の場合、二言語二文化を習得し、混合した「国際児としてのアイデン

ティティ」が最も安定的と考えられていた。一方で、聴覚障害者の場合は、ろう文化と手話をメインとした「聴覚障害者/ろうアイデンティティ」を形成することが最も安定的と考えられていた。

ここで、聴覚障害者のなかに位置付けられてきた難聴者のアイデンティティ形成について検討する。これまでの研究で難聴者が形成するアイデンティティには「聴覚障害者/ろうアイデンティティ」ではなく、「難聴者としてのアイデンティティ」があることが明らかになった。研究論文数は少ないものの、このなかには日常的に手話を用いる者が多いことが明らかになった(島根・井上; 2010)。また、この研究では小学校から一貫したろう教育を受けたり、ろう学校と普通学校の両方を経験したりした聴覚障害者のなかにも「難聴者としてのアイデンティティ」を形成している者がいることも明らかになっている。この結果を踏まえると、ろう学校でろう文化に触れ、日常的に手話を用いながらも「ろう者」としてではなく「難聴者」として自己を認識しており、この要因として、健聴者との音声言語でのコミュニケーションが可能であることが考えられる。実際に、軽度聴覚障害者には一対一でのコミュニケーションが可能なことにより、健聴者との関係形成が可能ながいる。また、人工内耳を幼少期に装用し、ろう学校に通っていたり、ろうの子どもと手話でかわる機会をもっていたりする聴覚障害者のなかには、手話を習得し、かつ明瞭な発話と聴取能力を獲得している者もいる。このような聴覚障害者は、健聴者とは音声、ろう者とは手話を用いてコミュニケーションをすることで、両方の集団とかわり、所属することができることが考えられる。この場合、彼らが形成するアイデンティティは、二言語二文化を習得し、安定したアイデンティティを形成する国際児と同様に健聴とろうの二言語二文化を習得し、両集団に所属できる「難聴者としてのアイデンティティ」になると考えることができる。実際に城間 (2003) は、人工内耳装用者のアイデンティティについて既に両文化の懸け橋的な存在として両文化に属するアイデンティティが存在する可能性を示しており、これは難聴者のアイデンティティ形成の新しい視点となると考えられる。

一方で、難聴者のなかには手話やろう文化を習得せずに健聴者のなかで難聴者との出会いを通してアイデンティティを形成していく場合もあり(藤邑: 2002)、この場合も自己を「難聴者」として定義する「難聴者としてのアイデンティティ」となる。よって、難聴者が形成する「難聴者としてのアイデンティティ」には、音声言語に加えて手話を獲得し、健聴者とろう者の両集団に所属する混合したアイデンティティと、手話を獲得せずに健聴者のなかで難聴者として生きるアイデンティティの二つのタイプがあることが考えられる。

また、難聴者が形成する「難聴者としてのアイデンティティ」の要因には、国際児アイデンティティや聴覚障害者/ろうアイデンティティと同様に「①彼らを受け入れる環境」「②自分自身の認識の一貫性」「③教育環境など文化接触に関与する環境」が関与すると考える。実際に難聴者を対象にした研究結果を振り返ると、藤嶋(2002)は、手話を習得せずに「難聴者としてのアイデンティティ」を形成した聴覚障害者のアイデンティティ形成における重要な出会いとして「同障者である難聴者との出会い」「理解ある健聴者との出会い」があることを明らかにした。これは、難聴者を受け入れる環境(①)であり、この出会いを通して難聴者としての自覚が生まれ、自分自身の認識に一貫性が生まれた(②)と考えられる。文化接触に関与する環境(③)については、難聴者においても教育環境が大きく影響すると考えられる。特に、学校選択については、国際児と同様に両親により規定される部分が大きく、両親の障害観や教育に対する考え方、家庭の経済状況などの家庭環境が反映されると考えられる。また、同年代や先輩の聴覚障害者とかかわる機会の有無についても両親に規定される部分があると考えられる。よって、両親の障害観や教育に対する考え方、家庭環境は、国際児のみならず難聴者の場合にもアイデンティティの形成にも影響を与えることが考えられる。以上より、難聴者としてのアイデンティティの形成には、「①彼らを受け入れる環境」として、「理解ある健聴者」に加えて「難聴者を受け入れるろう者・聴覚障害者」の存在が重要となることが考えられる。また、「③教育環境など文化接触に関与する環境」では、手話をコミュニケーション手段とするろうの子どものかかわりを幼少期または義務教育段階でもち、手話でかかわる経験をしてきたか否かが関与することが考えられる。

本研究では、国際児のアイデンティティ形成に関する検討から難聴者のアイデンティティ形成を検討する際の視座を得ることを目的として文献レビューを行った。二言語二文化接触を経験し、両者を混合したアイデンティティを難聴者も形成することが考えられた。しかし、国際児と難聴者の置かれている環境や心理的な葛藤の質的内容は同じではない。聞こえにくいという障害はコミュニケーションを困難にする。また、外見からその困難さがわからないため、周囲の理解が得にくい。これらがより一層難聴者の孤独感を強くする。河崎・若狭(2013)や富澤他(2014)は、幼少期人工内耳装用により聴取能力や語彙力が高くても、心理的不適応を引き起こす聴覚障害者の存在を明らかにしている。それはコミュニケーションの困難さや周囲による理解の困難さが背景にあると考える。よって、今後、未だ明らかになっていない難聴者のアイデンティティ形成とその要因を明らかにすることは、見えに

くくなった障害の陰に隠れた葛藤とその背景を明らかにすることにつながると考える。これは、今後、特別支援教育における自立活動や、通常の学校での障害理解教育による理解啓発を充実させ、難聴者への支援を考える際の一観点となり、聴覚障害児教育の一つの新しい視点を与えることができると考える。

## 補足

本論文で使用した用語について記述する。今回の文献レビューで使用した「聴覚障害者のアイデンティティ」の用語は、一時期「ろうアイデンティティ」と混合して使用されていた時代があった。今回は、聴覚障害者のアイデンティティ形成の研究の変遷と解明されてきた内容を明らかにするために、両者を区別して用いることはせず、筆者の判断で「聴覚障害者のアイデンティティ」については、「聴覚障害/ろうアイデンティティ」として用いた。

## V. 引用・参考文献

- 荒木友希子・新井瑠夏(2017) 幼児期に人工内耳埋め込み手術を施行した聴覚障害児のアイデンティティ形成について, 心理学の諸領域, 6 (1), 49-59
- 今里基(2017) ニューカマーの日韓ダブルの「祖国留学」から見るエスニックアイデンティティの考察 - オールドカマーとの比較から -, Core Ethics, 13, 25-36
- 岩田吉生(2001a) 聴覚障害青年のアイデンティティ形成に関する一考察, 治療教育科学研究, 21, 43-48
- 岩田吉生(2001b) 聴覚障害青年の自我同一性形成について - ろう学校高等部に学ぶ生徒との面接調査から -, ろう教育科学会第44回大会資料集, 17-20
- 岩田吉生(2007) 手話と聴覚障害者のアイデンティティ 長南浩人編著「手話の心理学入門」, 東峰書房, 77-103
- 上農正剛(2003) たったひとりのクレオール-聴覚障害児教育における言語論と障害認識-, ポット出版
- E. H. Erikson (1959) Identity and the Life Cycle, Norton社, 小此木啓吾訳編(1973) 自我同一性-アイデンティティとライフサイクル-, 誠信書房
- E. H. Erikson (1959) Identity and the Life Cycle, Norton社, 西平直・中島由恵訳編(2011) アイデンティティとライフサイクル, 誠信書房
- 甲斐更紗・鳥越隆士(2006) ろう学校高等部生徒のアイデンティティに関する研究, 特殊教育学研究, 44 (4), 209-217
- 梶山妙子・河崎佳子(2008) 軽・中等度難聴者の心



- 理, 村瀬嘉代子・河崎佳子編著, 聴覚障害者の心理臨床2, 日本評論社, 141-160
- 河崎佳子 (2003) 聴覚障害者(児)の心理, 聴覚障害, 58, 1-17
- 河崎佳子・若狭妙子 (2013) 特別支援教育②聴覚障害児教育と心理支援, 臨床心理学, 5, 116-121
- 窪田祥子・金恩河・鄭仁豪 (2016) 青年期聴覚障害者のグループ・アイデンティティの様相と特徴に関する研究, 聴覚言語障害, 45 (1), 23-31
- 黒田生子 (2008) 人工内耳とコミュニケーション, 装用後の日常と「私」の変容をめぐる対話, ミネルヴァ書房
- 小ヶ谷千穂 (2016) 日比ダブルの若者が語る家族とアイデンティティ-日本育ちの若者の語りから (1)-, フェリス女学院文学部紀要, 51, 1-27
- 坂田浩子 (1990a) 聴覚障害者の自我同一性形成について, ろう教育科学, 32 (2), 61-81
- 坂田浩子 (1990b) 聴覚障害者の自我同一性形成について (II), ろう教育科学, 32 (3), 109-125
- 相良啓子・齋藤佐和・根本匡文 (2001) 聴覚障害学生への障害認識に関する研究, ろう教育科学, 43 (3), 175-189
- 島根陽平・井上清子 (2010) 聴覚障害者における聾(ろう)と難聴のアイデンティティ-, 生活科学研究, 32, 27-35
- 城間将江 (2003) 小児人工内耳リハビリテーションをめぐる考察, 手話言語コミュニケーション研究, 35, 12-18
- 杉田律子 (2000) 普通学校にインテグレートした聴覚障害者の自我発達に関する研究, ろう教育科学, 42 (3), 145-158
- 鈴木一代・藤原喜悦 (1993) 国際児の文化的アイデンティティ形成についての事例的検討, 東和大学紀要, 19, 123-136
- 鈴木一代 (1997) 日系インドネシア人の文化・言語習得-居住地決定との関連性について-, 東和大学紀要, 23, 115-130
- 鈴木一代 (1999) 国際児の文化的アイデンティティ-多文化環境のなかでの発達-, 25, 205-213
- 鈴木一代 (2001) 日本-インドネシア国際児の言語・文化習得についての一考察, 埼玉学園大学紀要(人間学部篇), 創刊号, 1-11
- 鈴木一代 (2004) 特定課題研究 国際児の文化的アイデンティティ形成-インドネシアの日系国際児の事例を中心に-, 異文化間教育学会(編), 異文化間教育, 19, 42-53
- 鈴木一代 (2005) 日系国際児の文化的アイデンティティ形成: 事例の検討, 埼玉学園大学紀要(人間学部篇), 5, 85-98
- 鈴木一代 (2007) 特定課題研究 国際家族における言語・文化の継承-その要因とメカニズム-, 異文化間教育学会(編), 異文化間教育, 26, 14-26
- 鈴木一代 (2008) 海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成, プレーン出版
- 鈴木一代 (2010) 日系国際児の言語・文化の継承についての研究: 外国人の母親の場合, 埼玉学園大学紀要(人間学部篇), 10, 99-111
- 鈴木一代 (2011) 日系国際児の文化間移動と言語・文化・文化的アイデンティティ, 埼玉学園大学紀要(人間学部篇), 11, 75-88
- 鈴木一代 (2012) 思春期の日系国際児の文化的アイデンティティについての研究, 埼玉学園大学紀要(人間学部篇), 12, 79-92
- 鈴木一代 (2016) 多文化環境と精神的健康: 文化的アイデンティティと「居場所」を中心に, 埼玉学園大学紀要(人間学部篇), 13, 97-106
- スティーブン・マーフィ重松 (2002) アメラジアンの子どもたち-知らざるマイノリティ問題-, 集英社新書
- スティーブン・マーフィ重松 (2014) ミックスフルーツの人々にとってのホームを探す物語-「私たち」のストーリーを語るということ-, 異文化間教育, 40, 85-96
- 関口知子 (2003) 在日日系ブラジル人の子どもたち-異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成-, 明石書店
- 竹田美知 (2008) 海外在住の国際結婚から生まれた子どものアイデンティティ形成に与える影響要因-国際結婚を考える会の場合-
- 富沢文子・河野淳・芥野由美子・野波尚子・西山信宏・河口幸江・鈴木衛・齋藤友介 (2014), 中学校以上に進学した人工内耳装用児における聴取・発話・語彙力の検討, Audiology Japan, 57, 250-257
- 鳥越隆士 (1998) 聴覚障害児の心の成長とアイデンティティをめぐる, 手話コミュニケーション研究, 27, 27-31
- 藤邑正和 (2002) 難聴者の障害受容過程に関する一考察, ろう教育科学, 44 (1), 13-23
- 箕浦康子 (1984) 子どもの異文化体験, 東京: 思索社
- 箕浦康子 (1994) 異文化で育つ子どもたちの文化的アイデンティティ, 教育学研究, 61 (3), 213-221
- 森川与志夫 (2009) 国際結婚家族の子どもたちの「声」-カテゴリー-, エスニシティ, アイデンティティ-, 大阪市立大学人権問題研究, 9, 67-75
- 山口利勝 (1996) 聴覚障害学生における自己意識形成および現在の自己意識と相対性形成との関連についての研究, 広島大学教育学部紀要第一部(心理学), 45, 139-144

山口利勝 (1997) 聴覚障害学生における健聴者の世界との葛藤とデフ・アイデンティティに関する研究, 教育心理学研究, 45 (3), 284-294  
山口利勝 (1998) 聴覚障害学生の心理社会的発達に関

する研究-健聴者の世界との葛藤とデフ・アイデンティティの影響-, 教育心理学研究, 46, 422-431